



アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

—アリス・ギア・アイギス外伝—

第一話 「映画研究部」

◆稲葉優陽の部屋

稲葉優陽はそれまで眠っていたベッドの上で半身を起こした。
カーテン越しの光が部屋を射し、外ではチュンチュンと鳥が鳴いている。

優陽
(……………)

まだ目が覚めきれておらず、うつらうつらとしている優陽。

優陽

（……懐かしい夢、だったな）

見ていた夢は、小さい頃に家族で行った千葉シャードにある遊園地の
思い出。

優陽

（……そうだ。あたしはあの時、アクトレスになりたいって思ったんだ）

段々と夢見心地の状態から現実へと意識が移ってくる。

それにつられ、半分しか開かれてなかった目蓋が徐々に開いていく。

そして全開に開かれた優陽の目は、その時を同じくして一筋の涙を零
した。

◆映画研究部部室

優陽

「あたし、アクトレスの映画を撮りたい！」

旧校舎の2階に位置する古びた教室。

そこは行方市立霞ヶ浦の裏中学校映画研究部の部室となっている。

部員は全学年合わせて6人。

放課後に開かれていた部会で、教卓を両手で『バン』と叩きながら稲
葉優陽が主張した。

漑音

「……は？」

調

「なるほど。この前の話はフラグだったわけね」

漑音

「なに納得してるの、調！」

この瞬間、部室内の空気は二つに分かれていた。

優陽の主張に呆気にとられた組と、優陽と調のドヤ顔を浮かべていた

組だ。

優陽

「あたし達も三年生になったし、次に創る映画が中学時代で最後の映画になるでしょ？ だから最後にアクトレスの映画を撮りたいの！」

漣音

「いや、優陽がアクトレスを好きなことも知ってるし、今は次に映画についての話し合いをしているわけだし、アンタの主張も理解できるわ。だけど夏までの4、5ヶ月で完成する？」

優陽

「どうして夏までなの？ 今は4月なんだし、あと1年あるよ？」

漣音

「いや、受験勉強しないんかい！」

優陽

「……あ」

調

「ホンキで忘れていた顔だね」

優陽

「あう……痛いところかれた」

勉強が少し苦手な優陽は受験の話題を出され、教卓に体を投げ出すように脱力した。

調

「アクトレスを題材にするってことは、ギアとか小道具を結構つくる必要がありそうだね。それにバトルシーンではCGエフェクトを多用しないと安っぽくなりそう」

優陽

「……やっぱり、厳しいかな？」

現実を突きつけられ、トーンダウンする優陽。

漣音

「んー、単純にできないとは言いたくないし、やり方を上手い具合に探れば受験勉強と並行してやれなくはないと思うけど」

優陽

「でしょ！ さすが漣音！ 頼れる部長っ！」

親友の前向きな発言に、優陽はシャキッと体を起こしVサインを漣音に向けた。

漣音は元気だけが取り柄の親友が落ち込む姿に少しだけ同情したこと

を、あっという間に後悔する。

漣音 「……どんなに褒めても何も出ないからね」

優陽 「あたしは何もいらないよ？ アクトレスの映画を撮れるなら！」

漣音は一度深いため息をつく。

しかし俯いた顔は少しだけ笑っていた。

漣音 （全く、優陽らしいや）

そして思考を僅かな時間で整えた後、顔を上げ優陽と改めて向かい合った。

漣音 「……で、どんな映画にしたいの？」

優陽 「え、どんな……って？」

漣音 「ストーリーとか演出プランとかよ。そこまでアクトレスの映画が撮り

たいって言うなら、何か考えがあるんでしょ？」

優陽 「あ、なるほどー……えっとね」

天井に視線をずらし、頭をポリポリと掻き出す優陽。

調 「……今、考えてもダメだよ、優陽」

議事録を黙々と書いていた調が、シャープペンを指でくるくる回しながら突っ込む。

優陽 「ごめん！ ぶっちゃけ、ノープラン！ だけど、アクトレスの映画を創りたいの！」

漣音・調 「……はあ」

漣音と調は同時にため息をついた。

奥井 「あのー」

唯一の三年生男子部員で、大道具兼小道具係の奥井正が恐る恐る話題に割り込む。

奥井 「それって、やっぱりボクも最後……」

優陽 「もちろん！」

『最後まで付き合わないとだめなんだよね?』という質問を途中で遮り、優陽は満面の笑顔で返答した。

奥井 「……うん、だよね、あはは」

奥井はあまりにも予想通り過ぎる答えに苦笑いを浮かべるしかなかった。

奥井 (今日、このあと塾の見学に行くって言えない、絶対に……)

漣音 「まあ、優陽の想いも、言いたいことも分かるよ? でもアクトレスを題材にした映画って今更感が無い?」

優陽 「無いよ! だって今、この瞬間だってアクトレスは人類のために戦っているんだよ!」

調 「私は会計として、ギアとかヴァイスとか小道具作る予算が心配」

奥井 「予算だけじゃ無く、作ること自体大変だけどね。その仕事はボクたちなんだろうし……」

優陽 「気合いでなんとかなるっ!」

漣音 「はあ……気合いだけでなんとかなら何も苦労しないわ……」

漣音は右手を頭に当て、親指と人差し指でこめかみを押さえる。

漣音 「奥井君、CGエフェクトの見立てはどう？ いけそう？」

奥井 「部にあるPCだと少しスペックがキツイかな。やれないことはないけど、時間がかなり掛かりそう」

調 「ちなみに新しいPC買う予算とか、ウチにはないから」

優陽 「えっ？ そんなに凄いエフェクトいる？」

漣音 「レーザーとかミサイルとか、どうするの？ まさか、ヴァイスと殴り合いして終わりってわけじゃないでしょ？」

優陽 「……あはは」

部員 「……………」

優陽の乾いた笑いは、部員達に不安しか与えなかった。

漣音 「……とりあえずCGとか置いておくとしても、アクションとかどうする？ 優陽、そんなに運動神経良い方でもないでしょ？」

優陽 「アクション……？」

漣音 「人類のために戦っているアクトレスを描きたいんでしょ？ その魅力を演出できるような見栄えの良いアクション演技できる？」

優陽 「できるっ！ だってアクトレスの戦っている動画、たくさん見たし！」

漣音 「……不安が加速していくわ」

泰介 「だったらさー、アクションやめて人間ドラマで行くっきゃないっしょ？」

イスの前足を浮かせて、絶妙なバランスを取りながら座っていた草野泰介が横から割り込む。

泰介は漣音の弟で中学二年生だが、優陽や調とは子供の頃から知っている仲なので、基本的のため口だ。

奥井 「泰介君、イスはちゃんと座らないと危ないよ」

泰介 「は、はい。ごめんなさい、奥井先輩」

それまで生意気な態度をとっていた泰介だったが、奥井の注意には殊

勝に従った。

澤音

「全く、泰介って奥井君の言うことだけは素直に聞くわよね。わたしの言うこともそれくらい聞いてくれればいいのに」

泰介

「うっせ、姉貴。悔しかったら奥井先輩みたく、綺麗な小道具作ってみろよ」

澤音

「うるさいとはなによ！ あんまり生意気なこと言うようなら、夕飯のおかず減らすからね」

泰介

「やれるもんならやってみな」

澤音

「クッ……今日の味噌汁、具を外して汁だけにするからな」

わなわなと拳を握る澤音に対し、あっかんべーで答える泰介。

そんな二人に優陽はまあまあと両手で押さえるようになだめるが、全く効果はなかった。

調

「まあでもさ、現実的にエフェクトとかアクションとか考えると、色々とし難いような案件ではあるね」

泰介

「同じバトルモノなら、特撮ヒーローやろうぜ！ これなら派手なエフェクトいらないぜ！？ せいぜいドカーンって爆発さえあればなんとかなるだろ！ んで、オレがヒーロー役！」

奥井

「ボクは何かを達成するような作品がいいなあ。みんなで大きな壁画を作るドキュメンタリーとか」

澤音

「わたしはラブロマンスかなあ？ もう、キュンキュンしちゃうような話を希望！」

調

「さーで、みんなが勝手言い始めたぞ。収集つかなくなってきた！」

部会がカオスになっていく様を楽しむ調。

みちる

「あの一、いいですか？」

議論（？）が白熱する中、恐る恐る真島みちるが手を挙げる。
彼女は優陽の隣に住んでいる中学一年生で、映画研究部の今年の新入部員だ。

優陽

「はい、みちるちゃん！」

優陽はビシッとみちるを指さした。

部室内のカオスは一旦収まり、みちるに視線が注がれる。

するとみちるはおどおどしながら律儀に立ち上がり、意見を述べた。

みちる

「わ、私は部活に入ったばかりだし、映画の撮り方とかよく分からないのでどんなものでも良いんですけど……そもそも、私、アクトレスについてよく知らないんです」

◆通学路（夕方）

回想シーン。

優陽達が行方市立霞ヶ浦の裏中学校は、のどかな場所にあった。
ド田舎と言っては失礼にあたるだろうが、東京シャードの住人からしたら十分に田舎町にカテゴライズされてしまうだろう。
西に霞ヶ浦、東に北浦と大きな湖に囲まれ、更に少し東に行けば海がある。

ただ中学校があるのは丘の上。
最寄り駅だった玉造駅が数年前に廃線となってしまったため、市街地に出るのが少し困難にはなってしまったが、自然に恵まれたロケーションだった。

そんな場所柄であるため、近所にアクトレスが住んでいるようなことはなく、あくまでアクトレスとは芸能人のようにテレビや雑誌で見る

だけの遠い存在だった。

部会が行われる数日前の放課後。

優陽、漣音、調は放課後、いつも通り一緒に下校していた。

優陽

「高校卒業したら、東京シャードに行って、ナンバーワンアクトレスになるんだっ！」

漣音

「えー、わざわざ東京に行かなくても、土浦にアクトレスの事業所があるんでしょ？ 水戸や取手、つくばにだってあるじゃん！」

優陽

「アクトレスといえば東京だよ！ 分かってないなあ」

調

「私は分かるよ、なんとなく」

漣音

「分かる、分からないは置いとくとしても、そもそもアクトレスになるって言うけどさ、危なくないの？ 戦ったりするんでしょ？」

優陽

「大丈夫だって！ アルバイト感覚でできるって雑誌に書いてあったし！」



調 「なんとなくお水な言い回しだね」

漣音 「んー、アルバイト感覚って……それでヴァイスと戦うの？ その雑誌、少し胡散臭くない？」

優陽 「漣音ちゃん、考え方が古いよー。お母さんみたいなこと言ってるし」

漣音 「いや、だから、みんな同じようなことを思うんだって！ アンタが樂觀すぎるのよー！」

調 「まあ、危ないってことを言い出すとキリが無いよね。ファーストフー

ドの店員だって下手すりゃ油がはねて火傷するかもしれないわけだし」

優陽 「そうそう、しべちゃんの言うとおりだよ！ 危険だって物怖じしてい
たら、何もできないよ、漣音ちゃん！」

漣音 「それは、そうかもしれないけど……」

優陽 「それにアクトレスは始めから戦うことが前提だから、より安全を考慮
しているハズだよ！」

調 「テレビの特番でも安全性は特に強調して言ってるね。プロパガンダに
見えなくてもないけど」

優陽 「プロパンパンダ？ なにそれ？」

調 「パンダじゃないよ。簡単に言えば、良いことを言っているけど、その裏
に何か意図があるんじゃないかってこと」

漣音 「この世に優陽が考えるような楽な仕事なんてないってことね」

優陽 「楽な仕事だなんて思っていないよー ただ、みんなのために戦うって素
敵だと思わない？ あたしはそんなカッコよくて素敵なお姫様に
なりたいだけなのー！」

漣音 「はいはい、頑張ってる！」

優陽 「うー、なんか投げやりに聞こえるけど……うん、とにかくアクトレス
になれるように頑張るよっ！」

駆け出す優陽。

そんな優陽の背中をやれやれといった表情でみつめる漣音と調だった。

場面は再び次に撮影する映画を検討しているシーンへと戻ってくる。

優陽 「みちるちゃん、アクトレス、知らないの？」

みちる 「あ、えっと、もちろんアクトレスという存在は知っています。だけど、そこまで詳しく知らないというか……」

優陽 「アクトレスは人類の敵、ヴァイスと戦っている女の子達のことだよ！

みんな可愛くてカッ」いい女の子達なんだよ！」

みちる 「そ、その、それは知ってます……」

優陽 「あ、それじゃギアって分かる？ 体に身につけて、必殺技を繰り出すの。こう、バキューンって！」

両手で銃を構えてとても楽しそうに撃つ仕草をする優陽。

みちる 「も、もちろん知ってます……」

優陽 「それじゃあ、何がわからないの？」

みちる 「そ、そうですね……例えば……ヴァイスってどこから来ているんですか？」

部室内の空気が一瞬固まった。

まるで「宇宙はどこまで広がっているのか？」というような根源的な問い。

もちろん答えは誰にも分からない。

優陽 「え……？ そ、そりゃあ、う、宇宙じゃないの……？」

みちる 「宇宙のどこから？ どこかの星で生まれているとか？」

それまでおどおどと答えていたみちるが、食い気味に質問してくる。

優陽は少し圧倒され気味で、

優陽 「そ、そうじゃないかな、あはは……」

調 「ヴァイスにはまだまだ謎に包まれた部分が多くて、解明されていない点が多いね。もしかしたらAFGISは何か掴んでいるかもしれないけど、まだ一般には情報が降ろされていないと思う」

優陽 「そ、そう、そういうことだよ、みちるちゃん！」

漑音 「……はあ。言い出しっぺなのに、調の受け売りじゃない……」

みちる 「それじゃあ、そもそもアクトレスになるにはどうすればいいんですか？」

優陽 「……へ？」

漑音 「知らないのー？ あれだけアクトレスになりたいーって言っていたのにー？」

優陽 「う……それはこれから調べようかなって……思ってたから……」

調 「大方、東京に行けばなんとかなるって漠然と思っていたでしょ？」

優陽 「うっ」

漑音 「……はあ。そんなんでもよくアクトレスの映画を作りたいって思ったね」

優陽 「だ、だって……」

みちる 「ご、ごめんなさい、優陽ちゃん……私、決して優陽ちゃんを責めてるわけじゃなくて……」

優陽 「……ううん、みちるちゃんの言っていることはもっともだよ。あたし、アクトレスへの憧ればかりで何も知らなかった。むしろ、みちるちゃんに御礼を言わなきゃダメだね」

みちる 「優陽ちゃん……」

優陽 「けどね、それでもやっぱりあたしはアクトレスになりたい。何も知らないかもしれないけど、雑誌や動画を見てカッコいいって憧れているだけかもしれないけど、それでもやっぱりアクトレスが好きなんだ」

漑音 「優陽……」

優陽 「あたし、もう中三なんだよね。あと一年したらもうここにはいないし、みんなと離ればなれになっちゃうし……だから最後に好きなことをト

「トーンやりたくて……だから……」
「……………」

一同
優陽 「でも、みんなにも撮りたい映画があるよね？ アクトレスの映画は難しそうだし、みんなの撮りたい映画を……」

そこに映像研究部顧問の伊藤菜澄那が部室に入ってくる。

菜澄那 「……あら、ずいぶんしんみりした感じになってるけど、どうしたの？」

優陽 「先生……」

漣音 「えっと、今年作る作品について考えていたんです。でもなかなか話がまとまらなくて……」

菜澄那 「なるほどねー。例えばどんな案が出ていたの？」

泰介 「特撮ヒーローモノ！カッコいいバトルとかアクションやりたい！」

漣音 「ラブロマンス、とか」

奥井 「あ、えっと、何かみんなで物作りして成し遂げる感じのもの」

優陽 「……あ、あたしは、アクトレスの映画が撮りたいです！」

菜澄那 「なるほどね。それならアクトレスで良いんじゃない？」

優陽 「え……！？」

それまで影を落としていた優陽の表情がパツと明るくなった。

優陽 「菜澄那ちゃん！賛成してくれるの！？」

菜澄那 「こーら。いつも伊藤先生って呼びなさいって言ってるでしょ」

優陽 「あ、えへへ……」

泰介 「ちょっと待ってくれよ！オレはアクトレスなんか……」

菜澄那 「アクトレスだって戦闘するし、アクションするわよ？」

泰介 「そ、そりゃそうだけど……」

菜澄那 「それにギアを開発するシーンとか物作りの要素も入れられるし、アクトレスの恋愛だって描けるわ」

優陽 「そっか！アクトレスを題材にして、みんなが描きたいものを描けば

良いんだ！」

調

「……その発想はなかったわ」

菜澄那

「ふふ。でもね、私はアクトレスの映画を撮ること自体良いことだと思うの」

菜澄那はそれまで優陽と入れ替わるように教卓前に立った。

優陽は教卓近くの席に座る。

菜澄那

「貴方たちくらいの年齢で活躍しているアクトレスもいるし、都会に住んでいれば貴方たちだってアクトレスになっていたかもしれない」

優陽

「東京シャードには、中学生のアクトレスもいます！」

菜澄那

「ふふ、そうね。そんな可能性を映画で表現するのは決して悪いことだと思わないわ」

澤音

「……言われてみれば確かに。この辺りにはアクトレスの事業所とかないから、全然アクトレスになるなんて考えもなかったけど……」

調

「近くに事業所があれば、もしかしたら考えていたかもね」

女子部員達は、初めてアクトレスについて真剣に思いをはせていた。

奥井

「ボクは男だからアクトレスにはなれないけど、ギアにはもともと興味あったんだよね。アクトレスのピンチの時に新ギアを作りあげる展開とかあったら熱いかも……」

男は直接アクトレスにはなれないが、整備士という道がある。

物作りが得意な奥井にとって、漠然としていた卒業後の道筋がハッキリと目の前に現れた瞬間だった。

泰介

「先輩が良いって言うなら、オレも反対はしないけど……カッケーバトルシーンが入れば文句ないしな！」

調

「……ってことは、問題は予算くらい？」

優陽 「予算は気合いでなんとかするっ！」
澤音 「気合いだけじゃなんとかならないと思うけど、その辺りは脚本（ホン）次第だね」
調 「誰がホン書く？」
澤音 「そんなの決まってるじゃない！」
一同 「……………」

全員が優陽を見る。

優陽 「…………へ？ あ、あたし…………！？」
澤音 「言い出しっぺなんだから、当然っしょ！」
優陽 「あ、あたし、今までホンなんか書いたことないよ!？」
調 「気合いでなんとかするんでしょ？」
優陽 「う…………」

今まで反対意見を『気合い』で振り切っていた優陽だけに、それを突っ込まれると何も言い返せない。

みちる 「がんばって、優陽ちゃん！」
奥井 「稲葉ならできるよ」
泰介 「…………まで来たら引けないよなあ？」
澤音 「…………どうする、優陽？」

澤音は優しい笑顔で優陽に問いかけた。

優陽 「…………わかった、やるよっ！ その代わりに、全員付いてくるんだからね！」

拳を天へと突き上げる優陽。

一同 「オッケー！」

その他の部員達が優陽同様、一斉に腕を天に突き出した。

菜澄那 「……フフツ、楽しくなってきたかも」

◆通学路（夕方）

その日の帰り道。

優陽は頭を悩ませていた。

優陽 「うー」

漣音 「あはは、悩め悩め！」

優陽 「漣音ちゃんのイジワル……」

調 「まあ、でもさ。ある意味、今が一番楽しいでしょ？ これからどんな

方向にも話を転がせる……無限の可能性が広がっている時だからね」

優陽 「無限すぎて、何も見えないよ……はあ……」

その後も漣音と調からからかい半分の励ましを受けるが、次第に二人の言葉も入ってこないほどの重圧を感じ始めていた。

優陽 （どうしよう……みんなアクトレスのお話で良いって言うてくれたけど、本当にやりたいことは違うんだよね……）

部会で各々が言っていた言葉を思い出す。

漣音はロマンチックなラブストーリーが良いと言っていた。

泰介はアクションヒーローものがやりたいと言っていた。

奥井は何かを創るドキュメンタリーモノが好みらしい。

それらを押し切って決まったアクトレスの映画。

今となつては、それが少し負い目にも感じていた。

優陽

（本当にアクトレス中心のお話で良いのかな？ それともアクトレスを登場させながらも、アクションやラブストーリーの要素を強くしたお話にした方が良いのかな……？）

【選択】

優陽が描くアクトレス物語の方向性は？

《A みんなの意見を取り入れたアクトレス要素薄めの物語》

《B みんなの好意に甘えてアクトレス中心の物語》